



無名戦士たちの記録



失態続きの政府の下、
黙々と勇敢に戦った男女たちを
永遠に記憶しておこう

麻生

幾
(作家)

道路啓開・国土交通省の戦い

黄色い虎が舞った。

誰も気分を鼓舞するような軽快な踊りだった。約八百年前から続く岩手県釜石市の郷土芸能。市民なら誰でも知っている。

続けて行われたテープカットにハサミを入れた、東北地方整備局長、徳山

日出男は感慨深かった。釜石市に四・六キロの新しい道路が今日、三月五日、開通する。国土交通省が建設を進める三陸縦貫自動車道は壮大な計画だが、この日で五割が完成する。

式典が終わると、場所を「鶴住居」の地区防災センターに移し、徳山は、地元の住民たちの歓待を受けることとなった。住民たちは親しげに、「局長さん」と言って集まり、こそって手作りの料理を並べてくれた。

仙台市青葉区にある東北地方整備局

は国土交通省の出先機関といえども、東北全域の国道、港湾、河川をすべて管轄する巨大組織だ。

迎えの車に乗り、仙台から青森まで貫く大動脈、国道45号を目指し鶴住居のはずれまで出ようとしたときだった。車窓から、ふと三基の記念碑らしきものが目にとまった。尋ねる徳山に、案内役の三陸国道事務所長、斉藤廣見が、言った。

「確か、百十五年ほど前のことでしょうか。三陸沖で地震があり、この集落

を大津波が襲いましてね。村人が八百人も亡くなったとか。あれはここまで津波が来たという警告の碑です」

その惨事を知らなかった徳山も、宮城沖の地震と、それに伴う津波が、三十年以内に九九%発生すると言われていたことは理解していた。だからこそ、今日開通した道路は山側に造ったのだ。徳山は腹に力を入れる気分だった。これからやることはヤマほどある。津波到達区域と知りながら住んでいる彼らを守らねば——。徳山の脳裏に、人なつっこい鵜住居の子供たちの笑顔が浮かんでいた。

三月十一日午後二時四十六分。

防災課長の熊谷順子くまがいのんこは、その日、その時、自分のデスクの前に座っていた。事務系から技術系に敢えて志願した熊谷。かつて最前線の国道事務所ですら副所長にも抜擢されたのは、高度な専門知識と何事にも動じない強い精神に高い評価がなされたからだ。だから、本局では初の女性課長に抜擢された。

緊急地震速報が局内に鳴り響いた。熊谷は思わず立ち上がった。それでも、最初は小さな横揺れだった。

ところがすぐに激しくなった。書棚やロッカーが次々と倒れてゆく。猛烈な揺れが襲った。何かに掴まらなければ立ってられないほどの激震となった。突然、電灯が消えた。停電だ！だがすぐに再び灯った。非常用の自家発電が立ち上がったのだ。

宮城県沖地震だ！熊谷は咄嗟にそう思った。

防災のプロである熊谷だけではなく、東北の住民は、宮城県沖地震の脅威をよく知っている。備えるための啓蒙活動も活発だった。

「災害対策室へ行って！」

熊谷が男性職員に言った。まだ揺れは収まっていない。それでも熊谷は指示を下した。俳優の坂口良子りょうこのイメージとはアンバランスな怒声だった。

部屋の照明をつけた熊谷は、広大な空間の一番奥にある情報通信班のデスクへ駆け寄った。熊谷は急いでパソコ

ンを操作した。部屋の正面に設置されている情報表示ディスプレイの種類が〈宮城県沖地震〉モードとなった。中央の、五十インチの巨大なDLPディスプレイ八面。NHKの臨時ニュースが流れ始めた。左右にはめ込まれた、四十八面の二十インチのディスプレイでは、民放のチャンネルと、東北一帯に設置している約千八百カ所の国道のライブカメラからプログラムを選んだ映像が一斉に映った。

それから三日間。熊谷は、これまでの経験したことのない激務の真っ直中に放り込まれた。何をしたのか、はっきりと思いつけない。

ディスプレイを正面から見つめる局長席に座った徳山は、自分を落ち着かせるためと、何をすべきか、それを冷静に考えるため、紙にペンを走らせ、必要な項目を書き出した。中央画面で、NHKが震度を表示した。最高で七、その他、六強という地域が広範囲に広がっている。マグニチュードは八・四——。

まさしく大地震だった。それも途轍もない広範囲に。多くの家屋が倒壊し、国道などインフラ被害も途方もない規模かもしれない――。



東北地方整備局の災害対策室。大震災当日、3月11日夜

へりをあげる

災害対策室に続々と幹部や職員が集まり始める中、徳山の脳裏に、突然、十六年前の光景が蘇った。阪神淡路大

震災が発生したとき、徳山は、本省の道路局で課長補佐を務めていた。徳山が思い出したのは、ヘリコプターからのライブ映像が始めて入ったときのこのとだ。阪神高速道路が横倒しになっていたのだ――。徳山は驚愕したまま呟いた。まさか……あり得ない……。

だから自分には経験がある、と徳山は思った。しかも、道路部長の川瀧弘之はそのとき、一緒になって立ち向かった。この「運命」に徳山は意を強くした。

徳山はマイクを握った。押し寄せた職員たちが混乱を極めていたからだ。「ちよつと聞いてくれ！」まずそう言い放った。全員が黙り込み、徳山を見つめた。

「恐らく、経験したことがないような地震がきた。今こそ落ちついて、各自の役割を果たして欲しい！」

席に戻った徳山は、大震災モードの指示を繰り出した。東北全域に展開する前線部隊、四十二カ所の国道事務所と百カ所の出張所の職員の安全と同時

に、通信が生きているか、を真っ先に手分けして調べさせた。

「局長、へりを上げます！ 無人（職員を待たず）で上げます！」

そう具申したのは熊谷だった。東北地方整備局は、仙台空港に専用ヘリコプター（へみちのく号）を保有していた。徳山は、彼女の機転の早きに感動した。しかし、彼女の機転がどれだけ重要であったか、しばらくして徳山は思い知らされることとなる。

ところが、指示を受けた（へみちのく号）のパイロットたちは困惑していた。地震で格納庫のシャッターが開かないのだ。職員がハシゴを持ってきて天井まで登り、引っかかっているワイヤーを切断。やっとヘリコプターをエプロンへと誘導できた。それでも、（へみちのく号）の離陸は午後三時二十三分。地震発生からたった三十七分後のすばやさだった。（へみちのく号）は、広大な仙台空港を飛び立った。それから数十分後、信じがたい光景を目にする――。

へみちのく号が海岸線に出たときのことだった。「ああ……すごい……ひどい」副操縦士の声だけが災害対策室（災対室）に響き渡った。災対室のDLPディスプレイには、ヘリコプターが撮影したライブ映像を映し出せる。しかし、画像は極めて悪く、ほとんど見られない状態だった。後から判明したが、青葉山にある中継アンテナが被災してしまったのだ。

名取川河口の周辺が広大に水没していた。大津波が襲ったことは間違いなかった。さらに、別の場所では津波が街全体を飲み込んでいる真っ最中だった。三キロ先の仙台東部道路へと突き進んでいる。沖を見れば、何重もの巨大津波が次々と大地へ襲いかかろうとしていた。南へ変針したとき、副操縦士の声が聞こえた。

へみちのく号、完全に、全域、冠水状態、使用不可です！
あり得ない、と熊谷は絶句した。仙台空港が津波の被害に遭うなどまったく想定していなかったからだ。

事務所や出張所の情報が続々と入り始めた。その度に、大声で報告が徳山の元に届く。だが、徳山は、その喧噪の中で、一人、無気味な感覚に襲われていた。得体の知れない恐怖感が体の奥底から立ち上がってくることに気づいたからだ。内陸部にある事務所や出張所だけからしか報告が届かない。しかも、それらはほとんど被害がない。ところが、湾岸エリアにある事務所からは、報告どころか、通信さえできない——。固定電話や携帯電話は東北全域ですべて不通となったが、マイクロ無線によって本局と事務所や出張所とは連絡が取れるはずであった。

釜石の事務所とはやっと連絡が取れた。だが、その報告に、徳山は言葉を失った。事務所が津波で二階まで浸水しました！ さらに、気仙沼の国道維持出張所からは、車庫が水没との報告があったのを最後に、まったく連絡が取れなくなったのだ。
もしかすると、我々には分からない、壮絶な被災地があるんじゃないか

——。へみちのく号は天候悪化で仙台よりも北部へは飛ばず状況はわからない。今回の震災被害は、多くの家屋が押しつぶされるといって、従来のものとは違う気がする。だから、頭を切り換えるべきか。津波が湾岸エリアの全域を襲った可能性がある——。

誰かに聞かれたら、勘だ、としかまと言えない。しかし、徳山には確信があった。その理由は、へみちのく号からの報告である。いたる所で陸が広範囲に水没している。しかも仙台空港まで——。救助を待つ市民が湾岸エリアに膨大にいるはずだ！



防災ヘリ（みちのく号）

る可能性が高い。

災対室が注目したのは、同じく、北へまっすぐ伸びた内陸の国道4号だった。国道4号は、何本かの東西方面の国道と交差している。そしてその国道は「くしの歯」状に重要都市を結んでいるのだ。国道4号からは、大崎市（宮城県）から同108号で石巻へ、一関市から同284号で気仙沼市へ、北上市からは同107号で大船渡市へとそれぞれ接続できるのだ。合計すると、湾岸に伸びる国道は十六本。それさえ通れば、主立った湾岸エリアの都市へ入ることができる――。

十六本、全部開けるぞ！ 災対室で声が上がった。

それぞれの事務所と出張所から近い国道を突きすすみ、どこが通れて、どこが通れなく、その場合、迂回ルートはどこか、それを緊急に調べる必要があった。図らずも、それら湾岸都市はいずれも壊滅的な被害を受けていたのである。混乱する災対室だったが、統制がとれつつあった。それもこれも、

徳山とともに陣頭指揮をしていた副局長の澤田和宏の存在が大きかった。まだ着任して一カ月足らずの徳山にとって、東北地方整備局の人材についてそれほど詳しくない。だが澤田は、あらゆる人脈に通じ、個人の能力も知り抜いていた。それがあつたからこそ、立ち上がりの混乱が最低限で済んだのだ。澤田は「くしの歯作戦」の指揮を、迷わず道路調査官の林崎吉克に命じた。岩手県久慈市出身の林崎は現地に精通していた。徹夜でプランが練られた。

三月十二日午前四時二十分――。

「啓開チーム」という、聞き慣れない名称の部隊が一斉に動き始めた。障害を取り除いて道を切り開くこと、それが「啓開」だ。しかし、啓開チームに与えられた任務は、生易しいことではなかった。軍隊の偵察部隊と同様、いかなる障害があろうと強引に排除し、道なき道をもひたすら突き進む、いわば「特殊部隊」だ。だから、東北全域の事務所と出張所から出発する啓開チ

ームへの命令は、ただ一言だった。

「突っ込め！」

啓開チームは、事務所と出張所の職員数名と、災害時の出動の協定を結んでいる地元建設会社が保有する「バックホー（パワーシャベル）」とその操縦士の構成で進撃を開始した。幾つかのチームが、途中、山崩れやガレキに遭遇したが、バックホーがすべてを蹴散らした。段差がある道路には、携行してきた土のうやアスファルト合材を投入し、応急処置を施した。

啓開チームへの厳命は、復旧、復興など頭に入れなくていい。またキレイな道を造る必要もない。車両が最低限、通れるようにすること、それが絶対だった。

また、ある啓開チームに参加した建設会社は、自らの社屋も津波で被害を受け、何人かが行方不明となっていた。しかし、五名の社員がバックホーとともに駆けつけた。彼らは家族のことを心配しながらもやってきてくれたのだ。



陸前高田市の啓開チーム
左端が東北地方整備局員、中央は自衛隊、右は岩手県警察官
奥に見えるのはバックホー

一方、海岸側から即急行せよとの命令を受けた釜石維持出張所の啓開チームは、パトカー（専用車）で出張所を飛び出した途端、バックミラーに映る光景に目が釘付けとなった。沖で大きな津波が幾重にも見えるのだ。しかも第一波は、簡単に防波堤を乗り越え、すでに湾内を満たし始めていた。

だが引き返すことは、啓開チームには許されなかった。ミッションを最優

先とする——それが体にしみこんでいた。

ガレキの中に人が……

偵察は前日から始まっていた。岩手県花巻市と釜石市を結ぶ国道283号の途中、通称「仙人峠」と呼ばれるエリアにある甲子跨線橋が落橋（橋の破損）しているとの情報が警察から入ってきたのだ。

報告を受けた徳山を含めた幹部たちは緊迫した。その国道は、東北自動車道から、三陸へ向かうための大動脈だったからだ。そこを通れないと、三陸エリアの人命救助は決定的に遅くなる——。

だが悪いニュースはさらに続いた。宮古市内にある宮古維持出張所から出発した啓開チームから悲痛な声が対室に飛び込んだ。

「膨大なガレキに阻まれて進めません！」

林崎がマイクロ回線と繋がった携帯電話に怒鳴った。

「ガレキ？ そんなもの、バックホーでこじ開ければいいじゃないか！」

しばらくの沈黙の後、その啓開チームから、悲しげな声が帰ってきた。

「それが……普通のガレキじゃないんです……」

「普通のガレキじゃない!？」

林崎が訝った。

「ガレキの中に……人がたくさん……」

対室の喧噪が止まった。幹部たちは困惑した。それではさすがに、バックホーで蹴散らすわけにはゆかない……。自衛隊員を急ぎ招き、手作業で道を開けるしかもはや選択肢はなかった。

また、肝心の国道4号でも重大問題が見つかった。福島市内の伏拝地区で、四車線が崩落していたのだ。

東北地方整備局で使う専門用語で、最悪のエマージェンシーであることを表現する「全止め」の状態だった。

深刻な事態だった。ここが通れないと、作戦の全体が根本から覆されてしまう——。

だが、担当した啓開チームは、道なき道を探し歩き、素早く展開した。そしてついに、迂回路を見つけ出してきたのだ。

「道路啓開完了！」

その報告が飛び込む度に、徳山は熱いものが体の奥からこみ上げてきた。建設会社の社員も含む啓開チームは、まだ余震が連続する中、山道をも突きすすんでいる。いつ土砂の崩落があるかも知れず、道路が崩れ落ちる危険性もある。それをものともせず、啓開チームは「突っ込み」続けているのだ。

開いた国道の数が多くなる一方、東京の国土交通省の対策本部は、「主力部隊」の投入を進めていた。全国の地方整備局から、あらかじめ指定された「テックフォース」を招集し、どんどん東北地方へ放ったのである。

テックフォースは、地方整備局のあらゆる分野のプロフェッショナルで構成されていた。

しかもほとんどが、過去、災害で任務にあたった経験を持つ。

大船渡がない！

彼らは、国道を開けた啓開チームの後を追い、復旧作業の具体的な工程を、その場で決断した。しかも、その予算さえ現場で素早くはじき出し、猛烈な勢いで復旧計画を立案し続けた。

震災翌日になって、災対室はようやく被災地の情報を把握し始めていた。ほかの地方整備局から、計四機のヘリコプターを得て運用できたことが大きかった。

災対室のDLPディスプレイに、湾岸エリアのライブ映像が続々と映し出された。徳山が思わず身を乗り出したのは、釜石港の映像だった。巨大なコンクリートの防波堤が、何カ所かで根こそぎ破壊されている——。徳山は、新たな感覚に襲われた。

恐怖感——正直な気持ちだった。津波の被害は、ある程度、あることは覚悟していた。しかし、津波の桁外れのエネルギーに鳥肌が立つ思いだった。

さらに、別のヘリコプターが大船渡の上空にたどり着いたときパイロットは混乱し始めた。

「確かに、地図にすると、ここが大船渡なのですが——」

送られてくる画像を見つめる災対室からは、「そこじゃない！ 大船渡には防波堤があり、港も——」

災対室のスタッフは絶句した。

事態が分かったのである。大船渡の港とその町のすべてを大津波が呑み込んでしまったっていたのだ。

しかし、戸惑う災対室に、さらに想像もしていなかった事態が待ち受けていた。

被災地と思われる町の市長や町長と連絡を取ろうとしてもまったく繋がらない者が余りにも多いのだ。しかも、町の災害対策班とも音信不通状態が続出した。彼らは災害専用の携帯電話を持っていないはずである。なぜ繋がらないのか——。

子孫に伝えよ

そんな中で、陸前高田市の災対班の存在が明らかになった。彼らは、給食センターの事務室の六畳一間を災害対策室として立ち上げていた。市役所も含め、町のすべてを津波が呑み込んだのだ。

時間の経過とともに、役所機能に深刻な問題を抱えているところが余りにも多いことがわかってきた。

徳山は決断した。東北地方整備局が保有している通信車をそれら自治体に送り込む手続きを急がせた。そして東北地方整備局の全域から職員を選抜き、自治体へ送り込んだ。職員たちに徳山が命じたのは、市長や町長の右腕となつて、被災地支援を行え、という前代未聞の任務だった。

さすがに睡眠不足で頭が朦朧とし始めていたとき、ヘリコプターからの報告に、徳山は急いでディスプレイを見上げた。鶴住居地区も津波で壊滅状態となり――。

徳山は、一人の幹部を呼んだ。あの町には、確か、津波記念碑があったはずだ。場所が分かるか？

資料を漁っていた幹部は、一枚の航空写真を徳山に手渡した。徳山は、ヘリコプターからの映像と忙しく見比べた。希望は脆くも崩れた。記念碑から下の村がほぼ壊滅していた。

そつと災害対策室を離れた徳山は、自分の部屋に戻った。涙が頬をつたつた。

開通を祝ってくれ、手作りの食事を与えてくれた、あの住民たちの多くが犠牲になったであろう。彼らを守ることはできなかった――自分を責める思いがこみ上げ、涙が止まらなかった。自分にできることがなかったのか――。徳山はそれからもずっと自問自答し続けた。

ふとそのことに気づいた徳山は、涙を拭いて部下の携帯電話を呼び出した。記念碑には確か、文字が刻まれていたことを思い出したからだ。間もなくしてやってきた部下は、一枚の紙を

徳山に見せた。記念碑に刻まれた漢文の翻訳文がそこにあった。

「この碑はいつか無くなる。しかし、この恨みを忘れてはいけけない。たとえ（この碑が）雨に洗われ、苔に蝕され、文字が摩滅しようとも、明治二十九年六月十五日の津波被害を昔からの言い伝えとして子孫に伝えよ――」

（文中敬称略）



両石津波記念碑